

第8回（2019年度）三島海雲学術賞 受賞者

【三島海雲学術賞】（人文科学部門）

長縄 宣博 国立大学法人北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター 中央ユーラシア部門
教授 博士（学術）
受賞テーマ イスラームのロシア：帝国・宗教・公共圏1905-1917

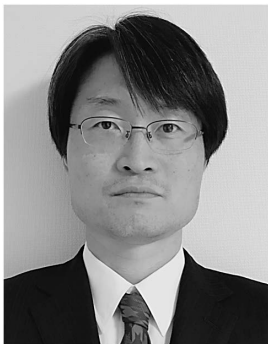
授賞理由

本書は、ロシア帝政末期のヴォルガ・ウラル地域におけるムスリム社会の変容、特にロシアの近代化の過程において形成された「ムスリム公共圏」について詳細な検討を行い、この地域におけるムスリム共同体の形成と発展に関して、従来の帝国対ムスリム社会というステレオタイプ的な見方とは異なる新たな視点を提起した力作である。

本書の特筆すべき点は、帝政末期のヴォルガ・ウラル地域における公権力とムスリム社会の交渉とそれに関わるムスリム社会内部の議論を、「公共圏」という概念を用いて検討していることにある。ムスリム公共圏は、ロシア政府が1905年の革命に対応すべく宗教行政の改革に着手する一方で、信仰や市民的自由を一定程度認めたことを契機として、ムスリムの利益を守るための空間として本格的に実体化した。だがその後、政府がロシア正教会やロシア人の利益を重視してこの空間を抑制するようになると、それは地域を分断したが、他方ではムスリム公共圏での議論の活性化をももたらした。第一次世界大戦ではムスリムもロシア軍に参加したので、公共圏の中においてムスリムとロシア市民という二つの共同体を結びつける可能性も議論された。しかし、帝政の崩壊はムスリムという宗派に基づく行政単位の正当性も失わせた。

本書のもう一つの特色は、ロシア語の行政文書とタタール語の新聞雑誌の両方を用いることにより、二つの異なる視点の接続を指向していることにある。双方の資料を利用することにより、ムスリム社会とロシア帝国の関係を偏りなく見通し、ムスリム社会内部の多様性、およびその複雑な相互関係を描き出すことに成功している。また、ヴォルガ・ウラル地域のムスリム社会の動向を、オスマン帝国はじめ広く周辺のアジア諸地域の動きと密接に関連付けて論じており、読むものを引き込む力を有する。アジア地域の歴史を中心とするすぐれた人文科学研究を顕彰する三島海雲学術賞にふさわしい傑出した業績である。

受賞者略歴



1999年 3月 東京大学文学部卒
2001年 3月 東京大学大学院 総合文化研究科 修士課程修了
2006年 3月 東京大学大学院 総合文化研究科 博士課程単位取得退学
2007年 6月 博士（学術）の学位取得
2007年 8月 北海道大学スラブ研究センター 准教授
2017年10月 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 教授

〈出身地〉 1977年 徳島県生まれ

〈研究テーマと抱負〉

中央ユーラシア近現代史。400年近くユーラシア大陸の大きな部分を占めるロシア—その多民族雑居の現場や全方位的に越境する人間の紐帯を考えることは、世界の過去・現在・未来を考えることにも等しいという確信を持って研究を進めていきます。

〈趣味など〉 娘と楽しい遊びをみつけること。